

<教育利用> ③ 生成AIを用いた美術教育～デザイン専攻「意見広告」の制作～

実践内容

意見広告の制作(2年デザイン専攻)

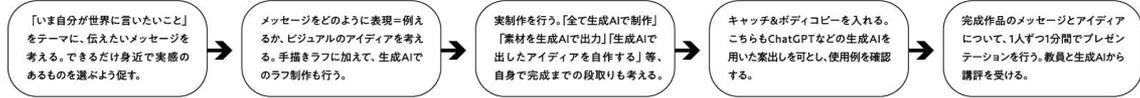
「意見広告」は「見た人が「なるほど」と納得する意見広告」を目指して、1人1つの広告を制作するもので、デザイン専攻では毎年恒例の課題です。

- ・ターゲットとメッセージは、自分の実感があるものを設定すること。
- ・自分の作品を「企画」と「表現」の2つの視点から考えること。
- ・何かに例えることによって、メッセージを伝わりやすくすること。

という3つの条件に、今回は「制作を進める中で、必ず生成AIを使用すること」を加えました。生徒が自らの創造性を発揮するプロセスの中にAIをどのように組み込むのか、その結果彼らの発想や構想、表現がどのように変化したかを分析・検証しました。

また、完成作品のプレゼンテーション時には、教員からの講評に加えて生成AIによる講評も取り入れました。

課題のプロセス



生徒たちの作品例



CASE 1

Aさんは「マイクロプラスチック(ゴミ)でできた魚を食べる人間」というアイデアを用いて、海中へのマイクロプラスチック廃棄問題の啓発を考えました。Aさんは早い段階でこのアイデアを導き出し、「プラスチックが体内に溜まった魚が並ぶ食卓」などのプロンプトで何度も画像を出力、見比べ自身のイメージに近いものを選んでいくことで、ブラッシュアップしていきました。最終的にはPhotoshopで複数の画像を組み合わせ、明度や彩度・色味やボケ加減などを調整し、自分の「作品」としてしっかりディレクションすることができました。



CASE 2

「エリマキトカゲの“襟”が割かれている」というアイデアを、玉ねぎが割かれている様子を重ね、野菜の過剰除去の問題を伝えようとしたBさん。いくら生成AIでエリマキトカゲを出そうとしても、どうしてもただのイグアナや、宇宙人のような生き物しか出力されません。最終的には出力した「ただのトカゲ」のイラストに、襟や手などを書き足して自身のイメージを表現しました。



CASE 3

Cさんは「人を見た目だけで判断せず、一歩踏み込んでみよう」というメッセージを、「スーツをすっぽりと被っている人」で表現したいと考えました。AIによる講評では「この作品は“情報の海を泳ぎ、真実を自らの手で探し求める必要性”というメッセージと、“布と手の動きを用いて、隠されたものを探る行為とその緊張感を表現する”というアイデアである」となり、「人の見た目」という生徒の意図は読み取れない様子でした。教員からの講評では、制作過程やプレゼン(生徒の意図)も含めてフィードバックし、それぞれの視点の違いが印象に残りました。

